

寿安堰と後藤寿庵

2

後藤寿庵の出自と、福原を去った後の足どり、没年と場所などについて、正確なところは判明していない。出自については、菅野義之助(明治七年気仙町生まれ。元県立図書館長、『奥羽切支丹史』など歴史研究に尽力)説をもって通説とされている。

文治五年(一一八九)源頼朝によって平泉が滅ぼされ、葛西氏の家臣として岩瀨氏が陸奥に入ってくる。寿庵はその岩瀨氏、藤沢城主岩瀨秀信の二男(三男とも)であったという。

豊臣秀吉の天下取りとなる小田原攻めに参陣しなかった葛西氏とともに、岩瀨氏も滅び、寿庵は九州に逃れてキリシタンとなる。やがて京都の貿易商人田中勝助、田中を通じて支倉常長との出会いをきっかけに、慶長十七年(一六一二)伊達政宗に仕えることとなり、見分村(現在の水沢市)福原に一、二〇〇石で封じられる。

寿庵の幼名は又五郎であったと云われているが、長崎、五島列島などを転々としているうちに、キリスト教の熱心な信者となって、苗字も初め「五島」姓とし、名前も又五郎に代えて、ヘブライ語でヨハネに当たる「ジョアン」姓と名乗った。

その後、伊達政宗に仕えることになり、「後藤」姓に改め、政宗の家臣として、大坂冬の陣、夏の陣では鉄砲隊の小隊長格として出陣する。



水沢カトリック教会にある後藤寿庵の立像。

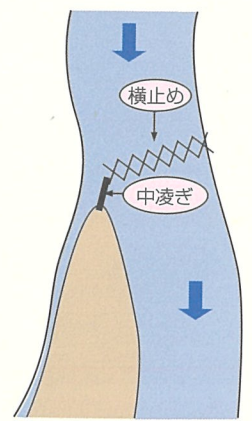
寿安堰が開鑿された背景について、茂井羅堰の項でも紹介した板橋教授は、元和年間(一六一五〜一六二四)の伊達家文書に、土地開発に関するものが多数あり、開拓や堰の工事に対して、経済援助や免税を約束して、政宗の大規模開拓政策を時代背景として、寿安堰が開鑿されたのではないかとしている。

元和四年(一六一八)、政宗は胆沢と磐井の地を巡視して、川や堰の地図を作成し、開拓計画の指示をしている。寿庵が胆沢の見分森で政宗に謁見したのはこの時である。

このことから、「寿安堰」の開鑿を元和四年とするチースリク(フーベルト・チースリク、一九一四年東独生まれ。一九三四年来日、イエズス会司祭、上智大学教授)の説が定着しているようである。開鑿年代に



【寿庵堰の旧取水口】



戦後間もない頃の寿安取水口

図(1)

前出の佐々木盛氏談では、「寿安では木組みで横止めをして、戦後騒いだこともあった。中凌ぎだけでは、本流の流れが変わったりして取水できなくなるので、堰止めをした。寿安の中凌ぎは、最初は短かったが、水勢が変わるたびに逐次伸ばして行った。横止めは中凌ぎの先端で止め(図(1)参照)。寿安では昭和二十五年まで横止めをした。私も見ている。その木組みをするために、寿安堰では大歩に山を持っていて、松を植林し、それを伐って横止めの材料にしていた。横止めは常時されるのではなく、本場に漏水して入らなくなった時だけ行われた」と語っている。

円筒分水工(昭和三十三年完成)以前の昭和初期は、大歩の阿部サトミ(大正四年生まれ)さん談によれば、「寿安取水堰分には長さ約二間位の板橋があって、中島と左岸の間に吊り橋がかかっていた。昭和八年にここに嫁に来たが、それで降り橋が二度落ちた。普請ザルを持って、野山田あたりの人たちが来ていたのを記憶して」云々のことである。



昭和14年当時の「川普請」(石や砂をさらって水を流れやすくする)の様子。左側の石積みが「中凌ぎ」である。

ついでには、このほかにも元和三年（一六一七）春の起工説や、元和五年（一六一九）開鑿説、または年代を特定せず単に元和年間とする説もあるが、元和元年の春には大坂夏の陣に出陣しており、元和四年の政宗来郷との関係を見れば、元和四年から五年あたりの間とするのが確実なところかもしれない。

後藤寿庵の領地は、「石母田家文書」によれば、見分村分は三十二貫文のみで、多くは南下葉場村、塩竈村、都鳥村にあり、それらを合わせて約六十五貫文、その合計は石高にして約一、二〇〇石となる。寿庵の知行地の多くは、「茂井羅堰」がかりとなっており、単純に考えれば、自分の領地外への堰の開鑿ということになる。このことは、伊達政宗の命によって、胆沢郡全体の開拓を引き受けたものか、胆沢扇状地南東部前沢など多くのキリシタンが住む地域への考慮があったものなのか、不明な点が残されている。

領主としての寿庵の善政については、農民に対する税の軽減、滞納者への寛大などが伝えられているが、元和年間、元年の飢饉、三、四、五年と霖雨、大早ばつで凶作年が続いているところから、そのような措置がとられたのであろう。

寿庵は、鉄砲隊長として出陣したり、堰の開鑿にあたっては、「バテレン法」といわれる技術を駆使したと言われている。それらの技術は、長崎という当時唯一の西洋文化が入ってくる地において、外国人宣教師などから学んだものであろう。

寿安堰の取水口は、茂井羅堰よりも一キロメートル程上流の金入道にあつた。前述のチースリクによれば、「寿安堰」の工事は、胆沢川の洪水その他の障害によ

つて、いく度となくやり直しを余儀なくされたというが、外国人宣教師達に学んだ寿庵は大きな石材を使用して堅牢な石垣を築き、また、そのために新式の機械を用いたという。

測量、設計も、提灯や水桶などを駆使し、緻密なものであつたといひ、また、開鑿用具の調達を計算に入れ、堰のルートに鍛冶屋を置いたことなども伝えられている。

河川取水の一般論からすれば、茂井羅堰より後から開鑿されたと言われている寿安堰が、同じ胆沢川から取水する茂井羅堰より、上流に取水口を持つことは著しく困難であるはずである。それを可能とした背景には、胆沢扇状地の大開拓に対する藩主伊達氏の強い意志が働いていたのかもしれない。

「寿安堰」の開鑿に大きな功労のあつた寿庵であったが、熱心なキリシタンであつたがゆえに、堰の完成を見ぬまま福原の地を追われることになる。

元和年間末、それまでどちらかと言えばキリシタンに寛容であつた仙台藩の取締まりも厳しくなり、後藤寿庵は元和九年（一六二三）の暮、福原の地から密かに逃れて行く。寿庵の福原在住は、僅か十一年間でしかなかつたのである。寿庵の逃亡先、その後の消息は一切わかっていない。

胆沢扇状地の伝説 其三

寿庵の魔法

筆者が昭和五十一年（一九七六）に取材した折に、寿庵にまつわる昔噺として聞いたのが、以下の話である。

「寿庵は、人夫使つて堰を掘つたけども、お金がなくなつたそうだね。そうしたら、寿庵という人は魔法を使うんだつてね。昔は穴のあいたお金に糸を通して、百とか五十とか、まどめたお金はそうして使つたそうだけれども、寿庵は、粟の穂を（息を吹きかけるしぐさで）魔法でお金に化けさせ、それを人夫に払つたものなんだつて、人夫は化けたお金を持って買物をする。次ぎ、次ぎと三人目に渡るまでは、化けたお金になつていたけれども、四人目の人に渡つた時、魔法がとけて、もとの粟の穂になつてしまった。皆んなにわかられた時には、寿庵はもう姿を消していったつて」

この話は、寿庵堰の水利議員をしていたお爺さんから聞いた話だそうて、話者は明治四十一年（一九〇八）生まれであつたから、祖父の話は江戸末期にはあつたものであろう。



現在も胆沢川に残る寿安堰旧取水口の「中凌ぎ」の跡